

「東ジュニア WS 報告書」

文学研究科修士2回生・相澤亨祐

本年度の東アジアジュニアワークショップは台湾大学、ソウル大学、京都大学の3つの大学が参加し、2018年8月18日から21日までの4日間、台湾で行われた。行程は、まず最初の2日間が台湾大学のメンバーの案内によるフィールドワーク、3日目と4日目の午前が各大学の学生たちが発表を行うジュニアワークショップ、4日目の午後が労働や人の国際移動、ジェンダーなどをテーマに各大学の教員が中心となって発表し議論するシニアワークショップであった。

報告者は2年前の2016年に京都で行われた本ワークショップにも出席しており、今回は2度目の参加となった。以下では、前回参加した際の経験も踏まえつつ、フィールドワーク、ワークショップ、総評の3つにわけて報告を記す。

【フィールドワーク】

フィールドワークで強く印象に残ったのは、台湾に暮らす多くの民族的マイノリティと呼ぶべき人々である。ミャンマー（ビルマ）の人々が集住する Huaxin Street では、漢字ではない言葉で書かれた看板が並び、ほかの地域とはあきらかに異なる独特の雰囲気をもっていた。また、台北駅からすぐそばには Little Indonesia と呼ばれる、インドネシア系のレストランが並ぶエリアがあった。しかし、こうした地区はけっして外から来る人を拒むような排他的な様子はなく周囲の社会とうまく融和しており、台湾が共生社会だと言われる一端を垣間見たように思った。一方で驚かされたのは、おそらく数百人はいたであろう台北駅のホールを埋め尽くす人々であった。彼らの多くもまた移民であり、平日は家事労働者などとして住み込みで働いているため自分たちの家を持たず、この日は外の雨をしのぎつつ、貴重な休日を家族で過ごしていたのだという。飲み物や食べ物を手にフロアに座り込み楽しそうに話す彼／彼女らから悲壮感は感じられなかったが、休日をこのような場所で過ごさざるを得ないという状況に移民社会の負の側面を見た気がした。わずか2日という短い期間のあいだに、こうした2つの側面を間近に感じることはできたというのは、自己の学びという点からみれば幸運であったといえるだろう。また、そうした機会を用意してくれた台湾大学の方たちに感謝したい。

【ワークショップ】

学生たちによるジュニアワークショップは、発表のレベルが2年前よりも上がっているように感じた。単なる事例やデータの紹介ではなく、それを分析し議論を組み立て結論を導くということができる発表が多かったように思う。その分だけ、フロアから出た指摘や質問もクリティカルで、非常に勉強になることが多かった。今更ではあるが、英語で発表することそのものが評価されるのではなく、あくまでも問われているのはそこで何を話すかであるという当たり前のことを改めて自覚させられたように思う。国際舞台で発表する英語力とともに、そこで話す自身の研究内容についてもより一層充実させていかなければならないと強く感じた。

【総評】

今回のワークショップには、東アジア内外から、台湾大学、ソウル大学、京都大学に留学している人たちが多く参加していたように思う。もはや、台湾、韓国、日本という3つの地域の相互理解という枠組みを超えて、より一層広く、複合的な興味関心や価値観をもつ人たちとコミュニケーションをとることができ、その点が非常に刺激的だった。

また、2年前のワークショップにも参加していた多くの教員や学生たちとの再会を果たせたことも自分にとっては大きな成果であり、喜びであった。今回新たに出会った学生たちの多くも、修士、博士課程への進学を予定しているという話だった。報告者は現在、博士課程への進学を希望しているが、彼／彼女らとの再会のためにもその思いをより一層強くした。